

## 日本運動器理学療法学会：これまでの活動と今後の展開について

代表運営幹事 木藤 伸宏  
運営幹事 東 裕一  
運営幹事 石田 和宏  
運営幹事 前田 慶明  
運営幹事 加藤 浩

### 日本運動器理学療法学会学術大会のこれまでの経緯

運営幹事 東 裕一  
2019年4月10日

日本運動器理学療法学会が単独開催した学術大会は第1回、第3回、第5回、そして第6回です。2018年からは連合学会がなくなり、分科学会学術大会のみの開催となりました。

回	開催時期	開催地	テーマ
1	2015年12月	東京	運動器理学療法の歩みと挑戦
2	2016年5月	札幌	理学療法士のアイデンティティ -基盤と分科-
3	2016年12月	金沢	運動器理学療法の未来と進歩
4	2017年5月	幕張	理学療法士の学術活動推進
5	2017年9月	札幌	運動器障害をどう捉え、アプローチするか
6	2018年12月	福岡	挑む 運動器理学療法の核心と革新

当学会運営幹事は、学術大会は運動器に関わる機能障害に対する理学療法についてディスカッションする場と考えています。臨床業務では医師の診断の基に機能障害に対する推論過程を重視し、患者を「ひとりの人間」として評価するには様々な学際領域の知識が必要です。その上で治療技術が活かされると考えています。また、発表にあたっては研究方法、統計学などの知識や技術も必要となってきます。日本理学療法学会の使命であるエビデンス構築には医学会との連携が必要と考えています。

基調講演では国際的に活躍されている理学療法士と整形外科医師に大局的視点から今後の理学療法のあるべき姿を教示頂きました。また教育セミナーとして様々な学際領域の医師からヒントをもらっています。第6回ではヒトの動作の基本であり診断や機能評価が難しい体幹について脊椎外科、高齢化社会で問題となる骨粗鬆症および骨折、最近注目されているメカノバイオロジーの3つの領域を選択しました。また、理学療法の目標としては意図をもって運動できるように導きますが、その際に考慮すべき学際領域として今回は神経系、バイオメカニクスを選択し臨床の実際と組み合わせてシンポジウムを構成しました。

若手の学会参加、および発表を促進する目的で研究法あるいは臨床推論過程を学習していただくプレ  
コンgressを開催し、座談会的要素も組み込んだ進行を依頼しています。

第3回日本運動器理学療法学会学術集会から臨床推論を重視した症例報告も募集し、意見交換をし  
ています。ポスター演題を含めた総演題数を増やすことでより多くの会員に学会場に来ていただき、  
多くの方から意見を聞くことができる機会としています。

第6回大会では2,200名を超える参加があり、多くの意見が交わされました。そして当学会運営  
幹事の想いに触れていただけたのではないかと考えています。我々運営幹事は、発表、研究にも興味  
を持って前向きに取り組んでいる会員が多いことを改めて認識し、学術的交流の場を作り続ける責務  
を認識しました。そして、今後さらに魅力ある学術大会を企画展開し、国民の健康維持・向上に寄与  
すべく学術活動に邁進していきたいと考えています。

## 全国規模の多施設共同研究の推進に向けて

運営幹事 石田和宏

2019年5月8日

日本では治療方針や診療ガイドラインに影響を与えるようなインパクトのある理学療法研究が非  
常に乏しい状況です。これは、国民の保健・医療・福祉の向上を目指している我々理学療法士にとっ  
て深刻な問題です。日本理学療法士学会の大きな使命としては根拠に基づいた理学療法の構築があり  
ます。そこで当学会では、運動器の理学療法領域におけるエビデンス構築に向け、多施設共同研究を  
推進していきます。多施設共同研究の実践のためには、計画的に研究を企画・運営する組織やグルー  
プ作りならびに支援体制、支援するための人材の育成、研究が実施しやすい環境整備の推進が必要で  
す。当学会では学会員が抱えているクリニカルクエスチョン（臨床上生じた疑問）から設定したリサ  
ーチクエスチョンの中でも特に国民に対して有益な内容については多施設研究に繋げられる体制を  
数年かけて構築します。また、医師と共によりよい理学療法を模索していくため、他学会との共同研  
究も推進できるような関係作りも大切であると考えており、他の医学会との連携も強化します。

当学会では数年前より日本腰痛学会理事長の紺野慎一先生および福島県立医科大学の関口美穂先  
生のご指導を仰ぎながら腰部脊柱管狭窄症の多施設共同研究を準備して参りました。本研究では全国  
約20施設が協力施設となり、日本腰痛学会の理事・会員の医師のご支援も頂きながら、データ収集  
の段階（2019年5月1日時点）まで至っております。本研究はあくまでも第一弾であり、今後は脊  
椎圧迫骨折、さらには脊椎疾患以外の多施設共同研究も同時進行で行っていきます。

国民に対して科学的根拠に基づいた最善の理学療法が提供できるように、倫理性、科学性、透明性  
を担保した質の高い多施設共同研究の実践を目指します。

## 今後どのようなテーマで学会を展開し、 日本運動器理学療法学会の発展につなげていくか

運営幹事 前田 慶明

2019年4月11日

日本運動器理学療法学会の今後の発展のために、第7回日本運動器理学療法学会学術大会（2019年10月5-6日開催）では、以下のことを目指しております。

- 1) 今回の学術大会のテーマを「繋ぐー学術と臨床の連携ー」とさせていただき、科学的根拠を積み上げるため、基礎研究と臨床研究をより一層、並行して進めていくことが重要であり、研究者や臨床家の立場を超えて、理学療法に関連する多くの方々よる情報発信が必要である。
- 2) 『研究のための研究』にならないように、最終的には臨床現場に還元でき、患者さんの運動器の健康を守る専門職としての立場を確立し、学問的に日本運動器理学療法学会の学術水準向上に貢献することを目指している。
- 3) 運動器の主な構成器官である骨・関節・筋は勿論のこと、呼吸器、循環器、心理、神経学、泌尿器・排泄、内分泌、バイオメカニクスなど多くの学問領域の知見を基に評価し、その評価所見に基づき治療を組み立てる。
- 4) 科学的根拠に裏付けられた理学療法を最善の水準で対象者に幅広く提供するために、保健・医療・福祉領域の現場に反映可能な理学療法研究を格段に推進し、日本運動器理学療法学会の発展につなげていく。